

## 第五項 時務報

はじめに

本項においては、変法運動における報刊の事例として『時務報』を取り上げる。

『時務報』は、変法思想の鼓吹に大きな役割を果たしたが、今その創刊の経緯とその機能、内容、参加者、意義、廃刊の経過などについて順次明らかにしていきたい。

### 1、時務報の発行

時務報の発行の経緯については、諸先学の研究があり、すでにそのあらましについて私も述べたことがあるが、上海強学会の禁止にともなって上海に設立されたのであった。<sup>①</sup>

すなわち梁啓超の創弁時務報源委によれば、

強学会の仕事をやめて後、汪康年は、上海にあって、年を越した。康有為先生に招かれて上海に往き、新聞社の仕事を改めて学会の仕事を続けようとした。この時、同郷の京官であった黄遵憲は、適々上海にいた。黄遵憲はもとより強学会の同人であったが、学会の停止と解散を憤り、再びこれを振わすことを謀り、新聞社を始めることを提唱し、汪康年と黄遵憲と私の3人は、日夜謀ってこの事を議した。<sup>②</sup>

とあり、(上海)強学会停止後、それに代わるものとして汪康年を中心として黄遵憲、梁啓超が日夜新聞を作ることを計画し、討論していたことが知られる。

さらに梁啓超の30自述では、

北京に強学会が開かれると、上海にもまたつづいて設立された。北京の強学会が禁止されると上海強学会も廃止された。黄遵憲はその復活を議し、一新聞社を開いた。手紙をもって私を招き、私は3月に北京を去って上海にやって来た。始めて黄遵憲と交り、7月には時務報が開始された。私は、記者の役に専任され、ジャーナリストとしての生涯がここに始まった。<sup>③</sup>

とあり、上海強学会禁止の結果、黄遵憲や梁啓超などにより、上海に『時務報』が光緒22年7月に開始されたことが知られる。

また、『時務報』第1冊に、発行年月日が光緒22年7月14日で上海4馬路石路に時務報館があったことが記されている。<sup>④</sup>

なお、『時務報』の創刊に当たっては、公啓が出されたが、そのことについて前述の創弁時務報源委によれば、

「時務報を始めた時、公啓30条を出したが、梁啓超が初めて草稿を書き、黄遵憲が大いに改定を加えた。」<sup>⑤</sup>

とあり、梁啓超、黄遵憲が公啓のために苦労している様子が知られる。

## 2、時務報の組織

『時務報』の第3冊の最後に本館弁事諸君氏名と題して、『時務報』役員の氏名が見えるが、それによれば、総理は、汪康年、選述は、梁啓超、英文翻訳は、張坤徳、仏文翻訳は、郭家驥、日文翻訳は、古城貞吉、理事で印書ならびに金銭の事務に当たったのは、黄春芳であることが知られる。<sup>⑥</sup>

なお、英文翻訳は、第31冊から李維格、第46冊から曾広銓が当たっており、仏文翻訳は、第55冊から潘彦が当たっている。さらに後に露文翻訳も加えられ、劉崇恵や李家鏊が当たっている。

つぎに、『時務報』第3冊の最後に各処の寄附金代収入として次の人名と場所が挙げられている。京城では、陳熾、李岳瑞、天津では、孫宝琦、湖北では、王秉恩、葉瀚、湖南では、鄒代鈞、張通典、南京では、繆荃孫、鄭孝胥、江蘇では、文焯、張祖翼、山東では、黄遵楷の計7省、12人である。<sup>⑦</sup>

また、時務報の初期の配布所としては、各処の電報分局と天津、烟台、成都、重慶、武夏、漢口（2ヶ所）、宜昌、沙市、湖南、常德、南京（2ヶ所）、淮安城内、蘇州、常州、無錫、寧波、廣州（2ヶ所）、香港（2ヶ所）、日本（2ヶ所）など24ヶ所に置かれたことが知られる。<sup>⑧</sup>

つぎに資金の面についてであるが、創弁時務報源委によれば、

「……すでに汪康年が上海に来たが、北京強学会は中止され、上海強学会も中止された。当時なお、七百余両があり、借りていた家屋もすでに1年の費用を出していたので、半年分三百五十元を得ることができ、会中の器物書籍などを売って二百余元を得た。合わせて千二百金を得たが、実にこれが時務報の始めであった。」<sup>⑨</sup>

とあり、最初千二百金余で『時務報』が開始されたことが知られる。

第3冊以後については、「創弁時務報源委」によれば、張孝達が七百余両を寄附し、汪康年、梁啓超が六百元の寄附を集めた。また黄遵憲が自ら千金を寄附し、鄒凌瀚が五百金を寄附したことが知られる。<sup>⑩</sup>また「致汪康年書」によれば、嚴復も百元寄附している。<sup>⑪</sup>

さらに第3冊の最後に見られる寄附者名簿には、前述の汪康年、梁啓超、黄遵憲以外に、盛宣懷、五百両、朱竹石、一百元、\*黄幼農、五百両、\*薛次申、二百元、\*黄愛棠、一百元、楊某、二百元、\*任寿華、十元、徐勤、一百元、\*胡貞甫、一百元、湖南礦務總局、百元となっており、これから後も冊子の終りに寄附金者の名前が見られる。<sup>⑫</sup>

また『時務報』の表紙には、一冊一角五分と書かれているが、この売り上げも重要な資金となったであろう。<sup>⑬</sup>

## 3、時務報の内容

『時務報』は、湯志鈞氏によれば、69冊出版されたが、<sup>⑭</sup>現在の台湾華文書局の影印本ではそのうち56冊が覆刻されている。

掲載されている内容は、論説、論摺、英文報訳、仏文報訳、日文報訳、露文報訳、ロイター電訳、中国内外の学会、会社についての紹介、時務報館の広告などである。

今、湯志鈞氏のまとめに従って、『時務報』に参加した人々の名前と執筆回数を挙げて置く。<sup>⑮</sup>

梁啓超60、汪康年15、麦孟華12、徐勤4、吳沈学3、章炳麟2、歐集甲2、張寿波2、汪大鈞2、孫同康1、姚錫光1、趙而麤1、高鳳謙1、何熙年1、朱紹文1、伍廷芳1、陳慶年1

以上であるが主な者だけ取り上げて行く。

梁啓超は、「論報館有益於国事」、「変法通議」、「波蘭滅亡記」、「沈氏音書序」、「論加税」、「説橙」、「西書提要農学総叙」、「西学書目例」、「論中国積弱由於防弊」、「古議院考」、「治始於道路説」、「戒纏足会叙」、「記江西康女士」、「日本国志後」、「農学报序」、「試弁不纏足会簡明章程」、「蠶務條陳叙」、「説羣自序」、「記自強軍」、「論中国之将強」、「記尚賢堂」、「萃報叙」、「史記貨殖列伝今義」、「医学善会序」、「中国工芸商業攷提要」、「記東俠」、「知恥学会叙」、「論君政民政相嬗之理」、「大同訳書局叙例」、「蒙学报演義報合叙」、「読日本書目志書後」、「倡説女学堂啓」、「日本横浜大同学校縁起」、「湖南時務学堂約10章」、「南学会叙」、「俄土戦紀叙」（戦紀叢書20種之1）、「経世文新編叙」を書いている。

そのうち、重要なものとして、「変法通議」、「古議院考」、「論君政民政相嬗之理」を取り上げる。

「変法通議」では、まず自序において変法の必要性を説き、易を利用して「窮まれば則ち変ず、変ずれば則ち通ず」といっている。<sup>⑯</sup>

ついで変法をしないことの害を説き、科学の廃止と学会、師範学校、幼学、女学、訳書の興隆を説き、商務について論じている。

「古議院考」では、まず欧米の議院について触れ、それが欧米各国を強くさせ、君権と民権が合わされ、情が通じ易くなっていることを述べ、ついで、漢代の職官制を議院になぞらえて、さらに、現代の中国が議院を開き国を強めることを説いている。<sup>⑰</sup>

「論君政民政相嬗之理」では、世界の歴史が君政に移って来ていることを説いている。<sup>⑱</sup>

つぎに汪康年は、「中国自強策」、「論中国参用民権之利益」、「論今日中国当以知懼知恥為本」、「為人為己不分為二事説」、「以愛力転国運説」、「懲訛言説」、「論中国求富強宣籌易行之法」、「覆友人論变法書」、「商戦論」、「論華民宜速籌自相保護之法」、「論膠州被占事」、「論将来必至之勢」、「論西人処置東亞之意」、「論亞州宣為唇齒」を書いている。

今、「中国自強策」と「論中国参用民権之利益」を取り上げる。

「中国自強策」では、中国が各地に瓜分されつつあることを述べ、士民共に治め、外国の近代化に学んで中国を独立富強の国にすることを説いている。<sup>⑲</sup>

「論中国参用民権之利益」では、欧米の国にも民権の国があり、中国は従来民権が述べられずに来たが、この国難にあって民権を用いて国の主権を守るべきことが説かれている。<sup>⑳</sup>

最後に麦孟華は、「樞署議内地機器製造貨物物征稅章程書後」、「論中国宜尊君權抑民権」、「論中国变法自官別始」、「民義論」、「尊俠篇」、「論中国会匪宜設法安置」を書いている。

ここでは、「民義論」を取り上げる。「民義論」では、欧米の富強の原因を民権に求め、中国でも民

権を用いて公司（会社）を盛んにすることを説いている。<sup>②①</sup>

以上、主な執筆者の執筆内容について見た。

また時務報に載せられている学会名は6、学校は6ある。

つぎに、参加者について考察して行く。

4、時務報の参加者

ここでは、時務報の参加者としてとりあえず、その役員、寄稿者、翻訳者、初期の寄附金代収入と主な寄附者を取り上げ、その本籍、官位など判明するものを挙げて置く。<sup>②②</sup>

報中の役割	姓 名	出 身 地	官 職 (又はそれに代る資格等)	関 係 学 会
発 起 人	汪 康 年 黄 遵 憲 梁 啓 超	浙 江 浙 江 広 東	進 士 領事官(元) 举 人	上海強学会、不纏足会、蒙学公会 上海強学会 北京強学会、農学会、不纏足会、医学善会、南学会、知恥学会、保国会
編 修 者	汪 康 年 梁 啓 超 張 坤 德 郭 家 驥 古城貞吉 黄 香 芳 李 維 格 曾 広 銓 潘 彦 彦 劉 崇 惠 李 家 鏊	浙 江 広 東 浙 江 直 隸 日 本 広 東 江 蘇 湖 南 江 蘇 直 隸 江 蘇	進 士 举 人      知 府	       蒙学公会
寄 稿 者	梁 啓 超 汪 康 年 麦 孟 華 章 炳 麟 徐 勤 勤 欧 榘 甲 吳 沈 学 孫 同 康 張 寿 波	広 東 浙 江 広 東 浙 江 広 東 広 東 江 蘇 江 蘇 広 東	举 人 進 士 举 人  生 員 時務学堂教習	  保国会、不纏足会  上海強学会  不纏足会

	姚錫光 趙而壽 高鳳謙 何熙年 朱紹文 伍廷芳 汪大鈞 陳慶年	江蘇 湖福建 福安徽 安徽東 安	蘇南 建徽 徽東	外 交 官	
翻 訳 者	黎汝謙 鄧廷鏗 楊葆寅 黃致堯 齊生第 朱開鏗 張永宗 鄭薩恒 錢超史 孫王史	貴州 広東 湖南山 (宝山) (通正) 江蘇 江蘇 江蘇 江浙 浙福	州東 南山 (山) (正) 蘇蘇 蘇江 江建		
寄 附 金 代 収 人	陳熾 李岳瑞 孫寶琦 王秉恩 葉瀚 鄒代鈞 張通典 繆荃孫 鄭孝胥 文廉焯 張祖翼 黃遵楷	江蘇 陝西 浙江 浙江 湖廣 福江 東	西 西 江 江 南 建 東	戸部郎中 工部員外郎 按察使 按察使 生員 候補知縣 知縣 翰林編修 知縣 知縣 知縣 知縣	北京強学会 西学会、保国会、閔学会  蒙学公会  不躋足会
寄 附 者	汪康年 梁啓超 黃遵憲 盛宣懷 朱竹石 黃幼農	浙江 広江 浙東 江蘇	江東 江蘇	進士人 領事官(元) 按察使 按察使 按察使	

薛次申		按察使	
黄愛棠		知 県	
楊某			
任寿華		生 員	
胡貞甫		生 員	
鄒凌瀚	江 西	部 郎	上海強学会、不纏足会
張考達			
嚴復	福 建	北洋水師学 堂總教習	自 立 会
徐 勤	広 東	生 員	

以上、参加者、61名で、出身地の判明するものは、43名であり、広東、江蘇9名、浙江8名、福建、湖南4名、直隸、江西、安徽各2名、陝西、貴州、日本各1名である。

これから見る限り、広東、江蘇、浙江にかたよりが見られる。

つぎに階層構成としては、官僚又はそれに準ずる者が27名おり、按察使（従2品）6名、部郎（正5品）3名、知府（正4品）1名、知県（正6品）7名、進士1名、外交官1名、元領事官1名、水師学堂總教習1名、時務学堂教習1名、挙人2名、生員4名、官職についていない者1名、未詳の者32名である。

また変法派内における派別としては、右派の麦孟華系の麦孟華、嚴復系の嚴復派、中間派の康梁系の梁啓超、左派の譚嗣同系に入ることが出来ると思われる章炳麟等が見られる。

さらに学会参加者は、13名である。

最後に奏摺などを時務報に転載されさた人達を表示すれば次の通りである。<sup>23)</sup>

姓 名	出身地	官 職 (又はそれに代る資格等)	関 係 学 会
容 闓	澳 門	按 察 使	自 立 会
張 之 洞	直 隸	湖広總督、大学士	北京強学会、上海強学会
陳 璧	福 建	御 史	
李 端 棻	貴 州	侍 郎	
王 鵬 運	広 西	給 事 中	北京強学会
盛 宣 懷	江 蘇	按 察 使	
王 益 格		祭 酒	
何 潤 生	安 徽	知 県	
康 際 清		知 府	
陳 熾 燾	湖 南	巡 撫	
華 燁		御 史	
陳 啓 泰	湖 南	保定知府	
勞 乃 宣		知 県	



何 熙 年		通 判	北京強学会
褚 成 博		給 事 中	
龍 宗 師		学政（江蘇）	
鄧 華 熙	広 東	安徽巡撫	
張 某		太興化府知府	
依 克 唐 阿		奉天將軍	
貴 鐸		翰林院編修	
翁 方 伯		江西布政使	
畚 積 勛		江西憚叔	
彭 彬 声		翰林院庶吉士	
文 廷 楷		内閣中書	
張 某		陝西巡撫	
趙 維 熙		陝西学政	
張 仲 圻		御 史	
李 秉 衡	奉 天	山東巡撫	
鹿 伝 霖	直 隸	四川總督	
楊 宣 治		通 政	
劉 樹 棠		兩江總督	
李 宝 章		浙江候補道	
米 海 利		開平礦師	
黄 幼 達		舉 人	
懷 某		河南彰衛道	
岑 某		河南按察使	
陳 忠 儼		知 府	
王 文 韶	浙 江	北洋大臣	北京強学会
葉 溶 光		知 県	
陶 模	浙 江	新彊巡撫	
胡 聘 之	湖 北	山西巡撫	
蔡 某		江海関道	
高 變 曾		給 事 中	
榮 禄	満 洲	協弁大学士	

これらの中には変法派の容閥をはじめとして、変法派、学会関係者が見られるが必ずしも変法に賛成している者ばかりではなく、榮禄のように変法派を裏切った人達の名も見える。

なお、当然のことながら、これらの人達は高級中級の官僚層が多く見られる。

## 5、時務報から昌言報へ、

以上述べたように『時務報』は、当時の変法派の人々は勿論、奏摺ではあるが榮禄のような人達の意見も含め多くの言論を取り入れており、時務報縁起に見られる「この報（時務報一筆者註）の貴ぶべき処は、その変法思想を鼓吹する重要な言論にあり、また恰かもまさに戊戌の時期にあたり、すでに多日醗酵して来ており、当時の思潮の動向、与論の要求、全国の上下に及ぶ普遍的政治覚醒を考察することができる」<sup>24</sup>というのは、至言であろう。また、魯迅、毛沢東、林語堂も読んでいた。

しかし、この『時務報』はやがて廃刊され、『昌言報』に移行することになるが、このことについては、諸先学の精しい研究があるが、ここでは、歴史的な事実だけに触れておく。<sup>25</sup>

光緒24年6月初8日に光緒帝は5月29日の御史宋伯魯の「時務報を改めて官報となすの摺を奏す」に対して、<sup>26</sup>

「又内閣に諭す。孫家鼐の上奏に従って上海時務報を改めて官報とする一摺を議した。報館を設けるのは国是を宣べて民情に達するためであり、必ず官が倡弁しなければならない。そこで該当の大臣が作った章程3條はいずれも妥当であるので、議する所に照らして時務報を官報に改めて、康有為を派遣してその事を督弁させるので発刊した報は随時呈進するように。……」<sup>27</sup>

とあり、新聞の重要性にかんがみ、『時務報』を官報にし、康有為に管理させようとしているのが知られる。

しかし、この背後には、汪康年と張之洞の密接な関係、汪康年、張之洞と梁啓超の対立、康有為の『時務報』の経営危機に対する配慮等がうかがわれる。<sup>28</sup>

この動きに対して汪康年は、『時務報』を『昌言報』に変えることによって、官報とするのを避け、これを梁鼎芬を主筆として別に発行しているが、戈公振氏によれば、この是非が大問題となった。しかしいくばくもしないで戊戌政変があり、『昌言報』もまた停止されて、康有為、梁啓超も日本に出たので結局、人々が問題になくなったという。<sup>29</sup>

以上、『時務報』の意義と『時務報』から『昌言報』への移行について述べた。

おわりに、

以上、『時務報』について述べて来たが、最後にそれらをまとめれば、『時務報』は、汪康年、梁啓超、黄遵憲などにより、光緒22年（1896年）7月14日、上海四馬路石路の時務報館においてその第一冊が発行された。

『時務報』は役員や、寄附金代收人、『時務報』の配布所の組織を持っており、資金面では、上海強学会の残金や、寄附金、報紙代でまかなわれた。

『時務報』の内容は、論説、論摺、各国の新聞の翻訳、学会、学堂、会社の紹介が載せられた。

執筆者の中で特に多いのは、梁啓超、汪康年、麦孟華であった。

『時務報』の参加者は、広東、浙江、江蘇にかたよりが見られ、中下級の官僚が多く、派別では各



派が参加している。

また、その奏摺などを転載されている者は当然ながら、上中級の官僚が多い。

最後に『時務報』は、御史宋伯魯の奏請により官報となる場所であったが、『昌言報』と名前が変えられ、別の性格のものとなった。

いままで、『時務報』のあらましを述べて来たが、汪康年、張之洞と梁啓超の関係などから見てその改刊は複雑であるが『時務報』が、変法鼓吹に大きな役割を果たしたことはいふまでもない事実である。

## 第六項 湘 報

はじめに

変法運動における報館の事例として、本項においては、『湘報』を取り上げる。<sup>①</sup>

『湘報』は、湖南省における変法運動の鼓吹に大きな役割を果たしたが、今その発行の経緯、意図、機能と組織、内容、参加者、意義などについて述べて行く。

### 1、湘報の発行

湘報類纂縁起には、「戊戌の春におよび、熊希齡等が同志をあつめ、資本を集め、新聞社を創設し、2月から日刊「湘報」を印行した。斬新の風格をもって、時務報、湘学新報の後を継いで新学を唱え、新政を行うことを宗旨とした」<sup>②</sup>と述べられており、『湘報』出版の意図がわかる。

ついで、湘報館章程により、『湘報』発行の意図などを見て行く。

まず、刊報凡例第1条には、「本館が購入した印刷機の鉛字は、同志が資本を集めて作ったもので風気を開き、見聞を拓くことを主としており、これをかりて生活をはかるというのではない。現在の湖南省の撫憲が1年の通常経費を引き出してくれるので、誌代として取る値段は極めて安い。僅かに生産費と紙代を取るだけなので、貴賤、貧富、士農工商の別なく皆湘報を見ることができる」<sup>③</sup>と述べられている。

すなわちここでは、『湘報』を発行しすべての人に読ませ、風気を開こうとしていることが知られる。

第6条には、「津海の各報は多く西洋の事柄を訳し、西洋を知る事を求めている。本報は、<sup>世に</sup>己を知ることを重ずる。巡撫等において、京師や各省督撫などの役所の公文書で湖南に来たものは、機密で宣伝できないもの以外は、あらゆる文は移して、おおむね原稿を記録するよう命令を出すことを求め、本館に伝達させて記事とする。本省の各役所の告示や曉諭の記録したものは、すべてこの例による」<sup>④</sup>とあり、国内、省内の問題を取り上げ、公文書で差しつかえないものを印刷し、湖南省、各省、清朝の事を知らせようとしていた事が伺われる。

ついで唐才常は、「湘報叙」で「おおよそ官も士も農工もただ読書を能として字を識るだけでなく、

類旁に触れて通じ、只千万の秘籍を購入するだけでなく、十・百の良師、益友を自分の側にあつめなければならない。

それは、中国を極めて総明な文明国にするためであり、私は、ここにその必然性を確信した。熊秉三（希齡）は民智のたちまち開くのを喜び、仏の慈悲をもって衆生をすくうことを欲している。だから同志を集め、資本を集め、湘報館を設け、平実を義求し、つとめて遊談を戒め、時務、知新、湘学の諸報の速<sup>はや</sup>ばないところを輔けようとするものである」<sup>⑤</sup>と述べられており、中国を文明国にし、民智を開くために熊希齡達が湘報館を設けた事が知られる。

「湘報後序」において、譚嗣同は、民を新しくするには、学堂、学会、報紙の開設が必要である事を述べ、中でも報紙については、「報紙は、是非とも衆とともに行く道であり、新会の梁氏は、君史、民史の説があり、新聞はすなわち民史であるといっている。……私は湘報の出るのを見て、あえて湖南省の民のために慶ぶ。諸君どうして憂う事があろうか、国に口があるのだ」<sup>⑥</sup>と述べている。

これから知られる事は、民の啓蒙のためにまた、その意見を発展させるのに湘報の発行が役に立つということである。

以上、『湘報』の発行とその意図について見て来たが、つぎに、『湘報』の組織と運営について考察して行く。

## 2、湘報の組織

すでに「湘報叙」の唐才常の文章でみたように熊希齡等が湘報を始めた事が知られる。<sup>⑦</sup>

「湘報縁起」によっても、戊戌の春に熊希齡等が同志を集め、資本を集め、新聞社を創設し、2月から日刊の湘報を発行した事が知られる。さらに「湘報縁起」には、「譚、唐の2人が筆政を取った」<sup>⑧</sup>と述べられている。

ついで章程によりその組織運営を見て行く。まず湘報館章程の刊報凡例であるが、13条よりなっている。その第9条によれば、「本報は学堂、学会とつらな一氣とする。各府州県の片田舎で報を購入できない者は、各府州県の南学会の分会の学友に請うて住所をしらべ、本館に手紙で知らせ、記帳する。住处ごとに送る報の数を計かる。省城の總會から、方法を考へて各府州県の分会の会友に行かせる。……」<sup>⑨</sup>とあり、『湘報』は、南学会の機関紙であり、<sup>⑩</sup>南学会、時務学堂、課吏堂などと連絡し、あまねく希望者に配布しようとしていたことが知られる。

同2条によれば、『湘報』は、毎日出し、1枚の紙を4葉に裁断して集めて本となし、小売価格5文であり、毎月、錢一百三十文を取ることが述べられている。<sup>⑪</sup>

第5条には、博学通達のを報友とし、その名前、住所録を作り、湘報を送る事、論議、ニュース、新事を寄稿してもらうこと、年末に報酬を与えること等が述べられている。<sup>⑫</sup>

第11条には広告の事が述べられている。<sup>⑬</sup>

第12条には、毎月、4、13、18の日は休みとし、『湘報』を出さない事が述べられている。<sup>⑭</sup>

ついで弁事凡例を見て行くが、19条ある。

第1条は、館中の管理責任者の担保の事が述べられている。<sup>⑮</sup>

第2条では、収入支出帳簿は毎月まとめ、6ヶ月ごとにそれを印刷して『湘報』と共に送ることが述べられている。<sup>⑯</sup>

第3条には、弁事の名前が湘報に載せられること、収支帳簿が証拠となることなどが述べられている。<sup>⑰</sup>

第4条では、本館の寄附はすべて受取証に総理が署名し、証拠とすることが述べられている。<sup>⑱</sup>

第5条には年末の決算の時、利益があれば、6割は、湘報館の維持に使い、4割は、各弁事人による働きの勤惰に応じて配分する事が述べられている。<sup>⑲</sup>

第6条から第19条には、報館での仕事の規則、内容、役割分担、給料の事等が書かれている。<sup>⑳</sup>

以上、湘報館の組織運営について、主に、章程によりそのあらましを見たが、つぎに、その内容について考察して行きたい。

### 3、『湘報』の内容

刊報凡例第3条には、『湘報』について次の記載が見える。

本館は、最初に論説、奏疏、次いで電旨を記す。次いで公牘を記す。次いで本省の新政を記す。

次いで各省の新政を記す。次いで各国の時事を記す。次いで雑事を記す。次いで商務を記す。もし尚余白があれば、政学新書を後に選んで載せる。記す所で、他の報より選んだものがあるれば、その報名を註出する。<sup>㉑</sup>

とあり、論説・上奏文の簡条書、電文の主旨、公式書簡、本省の新政、各省の新政、各国の時事、雑事、商務、政学新書が内容として取り上げられていることが知られる。

ついで執筆者について見て行くが、記載されている総数は42名である。<sup>㉒</sup> そのうち主な執筆者の姓名と執筆回数を挙げれば、以下の如くである。すなわち、譚嗣同23回、皮錫瑞12回、唐才常12回、樊維6回、何来保3回、熊崇煦3回、黄熙敬3回、梁啓超2回、楊子玉2回、陳宝箴2回である。

今、主な者の論説題目とその内容について主な論説を見て行く。まず譚嗣同であるが、「湘報後叙上・下」、「以太説」、「治事篇第一积名」、「治事篇第二弁実」、「治事篇第三学会」、「治事篇第四通情」、「治事篇第五平權」、「治事篇第六仕学」、「治事篇第七法律」、「治事篇第八財用」、「治事篇第九群学」、「治事篇第十湘粵」、「延年会叙」、「群萌学会叙」、「改併劉陽城郷各書院為致用学堂啓」、「記官紳集議保衛局事」、「試行印花稅条説」、「論電灯之益」、「論湘粵铁路之益」、「譚復生第一次講義論中国情形危急」、「第二次講義論今日学西皆中国古学派所有」、「第五次講義論学者不当驕人」、「第八次講義論全体学」を書いている。

そのうち主な論説として、「以太説」、「治事篇第三学会」、「湘粵铁路之益」を取り上げる。なお、譚嗣同の講義についてはすでに取り上げたことがある。<sup>㉓</sup>

「以太説」では、

……これは、何であるか。これは、法界、虚空界、衆生界に偏ねくある。至大・至精微がある。膠粘したり、あまねく貫いてしみこんだり、まつわりついたりしない所がなく、充滿している一つの物である。目は、その色を見ることができず、耳もその声を聞くことができず、口・鼻もその味や臭いを知ることができず、名前がない。これを名づけて以太（エーテル）という。それは、用に顕われる。浪となり、力となり、質点となり、脳気となる。法界はこれによって生き、虚空はこれによって立ち、衆生はこれによって出る。形はない。万形の麗しい所となる。心はない。万心の感ずる所となる。精しくこれをいえば、それはまた、仁というのみである。<sup>24</sup>とあり、エーテルがこの世界に充滿しており、それは仁と同一であると考えていることが知られる。治事篇第三の「学会」では、

天下に学会という名前はない。私は、ここに敢てこの名をつけて天下にせまる。幸いにして強学会は禁ぜられたといっても、それからの学会はこれによって開かれたものである。学会は大いなるかな。いわゆる変法の名はなくても変法の実はこれである。……

各々がその学問をもって学び、互いにその会で会う。……どうして憚って久しくしなかったのだろう。会が成れば、学が成る。……ここに変法の名はなくても、変法の実がある。<sup>25</sup>と述べられており、学会によって変法の実が挙げられているとしていることがわかる。

「論湘粵鐵路之益」では、まず、

今日の世界は、鉄道の世界である。鉄道があれば存し、なければ亡びる。鉄道が多ければ強く、寡なければ弱い。西洋人の統計学者が地球の各国の鉄道の長短を調べて図表とした所、米国が最も長く、中国が最も短く、各国の安危盛衰の数は、大むねその差による。<sup>26</sup>と述べられており、鉄道の重要性和中国の未開発が明らかにされている。

ついで、中国の鉄道の敷設の経過が述べられ、当面の問題として漢口から広東への鉄道の敷設が挙げられている。この粵漢鉄道では、2つの徑路が考えられている。1つは江西を通る道であり、1つは湖南を通る道である。譚嗣同は、前者には6つの不利な点があり、後者には、鉄道そのものの利益になる点が9、湖南に利益になる点が10あるといい、それぞれの点を明確にしている。

江西が不利の点として、習俗が守旧であり、上下の意志が通ぜず、地域的に見ても辺境の地で鉄道を敷設するだけの需要がない事などが挙げられている。

湖南を通ることが鉄道に有利になる点としては、徑路が直線で平坦であり、労働力があり、石炭や木材が産出され、有能な官吏や人民がおり、地理的にも重要な地域であるとしている。

湖南にとって有利な点としては、汽船によって衰耗していた交通を回復できること、ドイツの侵略を防ぐこと、海岸を手中に収め得ること、湖南省人の志気を高めること、商業を振わせること、湖南の鉱産品を運べること、農民を遠方に移動させ農業を全省に及ぼすことができること、鉄道で兵士を運ぶことにより兵力を有効に使用することができること、精巧な工芸を興すことができること、鉄道

により色々な仕事につくことができること等、10の点が述べられている。

その他にも、道路が全省に通じ、物資や人の交流が豊かになるとも述べられている。<sup>27)</sup>

以上要するに、譚嗣同の考えによれば、湘粵の鉄道を敷設することにより、安く有利に工事ができ、湖南省にも利益がもたらされるとしていたことが知られる。

皮錫瑞は、南学会で12回講義をし、それが載せられているが、すでに述べたので、ここでは題目だけを記す。<sup>28)</sup>すなわち、「論立学会講学宗旨」、「統論講学」、「論朱陸異同歸於分別義利」、「論学者不可詬病道学」、「論交渉公理」、「論保種教均必先開民智」、「論聖門四科之学」、「論孔子創教有改制事」、「論不變者道必變者法」、「論勝朝昭代之興亡原因」、「論變法為天地之氣運使然」、「論洋人來華通商傳教當暗求抵拒之法」を執筆している。

唐才常は、「湘報叙」、「弁惑上・下」、「論熱力上・下」、「論興亞義会」、「瀏陽興算記」、「公法学会叙」、「朱子語已有西人格致之理条証1～9」、「時文流毒中国論」、「論中国宜与英日連盟」、「論保衛局之益」、「書洪文治戒纏足説」等を書いている。

今そのうち主なものの一つとして「時文流毒中国論」を取り上げる。その最初で次のようにいっている。

海内の深識の士は、大きなおびやかしに心を痛め、むらがる大衆に大義を倡えていう。今中国は、民智を開き、民権を伸ばし、民心を一つにすることを策すべきであるというのは誠の言である。<sup>29)</sup>

ついで八股文について言及し、その問題点に触れ、董氏以来改革が加えられず、陋となっているとし、またこの八股文では一、二の豪傑が生れるだけで国の為になっていない。台湾や八股文を見習ったベトナムは、外国の侵略を受けている。だから八股文をやめるべきであると結論づけている。<sup>30)</sup>

樊鍾は、「開誠篇第一・第二・第三」、「発綱」、「上陳中丞書」、「飭湘江」を書いているが、そのうち「開誠篇第一」を取り上げる。

すなわち、それをまとめれば、まず、自分が新しい学問をするのは、自分の美名と私利ではなく、ポーランド、インド、アフリカのような轍を踏まないで、中国を存続させるためであると述べている。

ついで、自分にも足りない所があるからそれをなくすようにつとめなければならないこと、窮まらなければ変じない、変じなければ通じない、通じなければ久しくなく、久しくなければ中国が絶えることを述べている。

最後に、なんとか中国や礼教を救うべきこと、そのために方法を講じて自分達を改善していくべきこと、中国は最古の国であるが、それは積習も深いので、多くの障害があっても只いうだけではなく誠をもって改革して行くことを勧めている。<sup>31)</sup>

しかし、樊鍾の開誠篇等での言動は、すでに述べたように、のちに湖南省の保守的郷紳層から批判され、駆逐すべきであるといわれ、<sup>32)</sup>放逐された。



ついで、2回以上の執筆者の論題を挙げれば以下の通りである。何来保は、「説私」、「湘水校経堂宜改師範学校議」、「悲孔上・下」を熊崇煦は、「論実力上・下」、「四民合力生財説」、「中国自救莫如大開通商岸説」を、黄熙敬は、「庠胥吏用士人論」、「論湖南宜興蚕桑之利」、「洞庭新洲宜講求農学論」を、梁啓超は、「論湖南応弁之事」<sup>⑬</sup>、「論中国宜講求法律之学」を、楊子玉は、「息争説」、「湖南宜講求虚心考校之学」を、戴德誠は「変学芻蕘議」、「湖南宜善於守旧説」を、陳宝箴は、「論為学必先立志」、「論不必攻耶教兼及周漢事」を、書いている。

ついで公牘類が転載されている者でその数の多い者を挙げれば以下の通りである。陳宝箴6回、張之洞4回、徐仁壽3回、黄会壽3回である。

また、取り上げられている学会は、12あり、興亜義会、延年会、群萌学会、公法学会、学戦会、南学会、任学会、保国会、法律学会、三江学会、興算学会、湖南不纏足会である。学堂も11あり、上海女学堂(塾)、湖南致用学堂、中国大同学堂(校)、湖南靖州算学学堂、浙江杭州蚕学館、時務武備学堂、農学堂、実学堂、湖南時務学堂、湖南課吏館、農工学堂である。報館は、『湘報』と『時務報』の2つである。

取り上げられている公司や局は、両湖試弁製茶公司、両湖茶務有限公司、水利公司、両湖官輪局、保衛局である。

その他、鉄道、鉱務、商務等も取り上げられている。

#### 4、湘報の参加者

湘報の参会者として、まず、役員、寄稿者を挙げる。

報中の役割	氏 名	出身地	官職(それに代る資格等)
開設者	熊 希 齡	湖 南	翰林院庶吉士
編集者	譚 嗣 同	湖 南	候補知府
"	唐 才 常	湖 南	拔 貢 生
寄稿者	畢 永 年	湖 南	拔 貢 生
"	蔡 秉 鈞	湖 南	廩 生
"	易 嘉 祐	湖 南	
"	熊 崇 煦	四 川	
"	樊 維 錐	湖 南	生 員
"	楊 子 玉	湖 南	
"	何 来 保	湖 南	廩 生
"	黄 嘉 謨	湖 南	
"	劉 曾 鑑		長沙女師
"	李 永 瀚	湖 南	



	潘学会	清州会同県教諭
周会昌	湖南	
戴徳誠	湖南	候選訓導
戴頌虞	湖南	
鄭栄	湖南	
楊概	湖南	
汪恩玉	湖南	
張翼雲	湖南	
伍元槩	湖南	
梁啓超	広東	挙人
黄熙敬	湖南	
劉沢槩	湖南	
姜炳坤	湖南	
羅棠	湖南	
洪文治	浙江	
徐儒翬	湖南	
彭名寿	湖南	
黄整		湖南省官吏（官職不明）
許崇熏	湖南	
陳宝箴	江西	湖南巡撫
黄遵憲	広東	按察使
楊自超		知県
欧陽中鵠	湖南	中書科中書
鄒代鈞	湖南	候選知県
李維格	江蘇	監生
向味秋		書院長
曾広鈞	湖南	翰林院編修
喬樹楠	四川	刑部主事
皮錫瑞	湖南	江西南昌経訓書院主講
張通典	湖南	
王明忠	湖北	
蒋徳鈞	湖南	
李維格	江蘇	
董事		

以上によれば、報中の役割は、開設者が熊希齡、編集者が譚嗣同、唐才常、董事が王明忠、蒋徳鈞、李維格であり、その出身地は、湖南33名、江蘇2名、四川2名、広東2名、浙江、江西、湖北各1名、不明5名であり、圧倒的に湖南省出身者が多い。

次にその官職について見れば、巡撫（従2品）1名、按察使（正3品）1名、候補知府（正4品）1名、刑部主事（正6品）1名、知県（正6品）2名、翰林院編修（正7品）1名、中書（従7品）1名、翰林院庶吉士1名、県教諭（正8品）1名、候選訓導（従8品）1名、挙人1名、湖南省官吏1名、生員6名、書院長1名、書院主講1名、未流（女子）1名、不詳24名であり、巡撫（従2品）を最高に17名の官僚とそれに準ずる者2名、未流1名、不詳が24名いる。

すなわち、湖南省の変法派官僚とそれに同調する変法派郷紳層が多く見られ、特に、譚嗣同一派の唐才常、樊維、易嗣等、変法左派にかたよりが見られる。また、女子が参加していることは、注目されるべきである。

ついでその公牘類を転載された者を表示すれば以下の如くである。

姓 名	出身地	官職（それに代る資格等）
嚴 修		貴州学政
魏 光 燾	湖 南	陝西巡撫
高 燮 曾		給 事 中
恭 親 王	滿 洲	
廖 寿 豊	江 蘇	浙江巡撫
楊 深 秀	山 西	山東道監察御史
麦 孟 華	広 東	挙 人
梁 啓 超	広 東	挙 人
唐 才 常	湖 南	拔 貢 生
康 有 為	広 東	工部主事
張 之 洞	直 隸	湖広総督
譚 繼 洵	湖 南	湖北巡撫
胡 聘 之	湖 北	山西巡撫
王 文 韶	浙 江	北洋大臣
黄 会 籌		湖南道員
陳 宝 箴	江 西	湖南巡撫
徐 仁 壽	直 隸	湖南学政
黄 遵 憲	浙 江	湖南按察使
連 培 基		沅州知府
経 元 善	浙 江	江蘇候選知府
劉 頌 虞	湖 南	湖南土紳
蔣 德 鈞	湖 南	江蘇布政使
梁 肇 榮	湖 南	湖南土紳
蔡 某		上海道員
柳 正 勛		

楊 先 達		
馬 伸 林		

以上によれば、27名見られるが、その出身地の判明している者は、湖南6名、浙江、広東3名、直隸2名、満洲、江蘇、山西、湖北、江西、各1名で、湖南省がもっとも多い。

また、その身分、官職は、親王をはじめ、総督（正2品）1名、巡撫（従2品）5名など高い身分の者、或いは高官が多い。なお、その中に、湖南省の士紳が2名含まれているのも注目される。

## 5、湘報の意義

「湘報縁起」によれば、『湘報』は発刊後3ヶ月で停止されたが、<sup>34</sup>その意義は大きいと思われる。

まず、張之洞はその激しさについて触れ、湘学新報より湘報の方が激烈であったとしているし、<sup>35</sup>梁啓超は、「また『湘報』《日刊》、『湘学新報』《旬刊》を発刊した。その主張は学校（時務学堂）におけるがごとく激烈ではなかったが、じつはひそかに計画してやったことである」<sup>36</sup>と述べており、その積極性を知ることができる。

ついで、湯志鈞氏は、「文字は、湘学新報に較べてやや浅近である」<sup>37</sup>といわれている。湖南省志では、『湘報』は少なからざる維新変法を宣伝する論著を発表したが、言葉の使い方のいくつかに激烈なものがあり、頑固主旧派分子の攻撃を引き起した」<sup>38</sup>と述べられている。

また、小野川秀美氏は、湘報が革新思想を鼓吹したと述べておられるし、<sup>39</sup>林能士氏も、「『湘報』は、創刊後、『湘学报』と並んで当時の湖南維新分子の変法を宣揚する主要な言論園地となった」<sup>40</sup>といっておられる。

さらに、「湘報縁起」によれば、「湘報の発行は、一省にちじまっているといっても、実は、戊戌維新運動の最重要な原料の一種を保存している」<sup>41</sup>ともいわれる。

以上まとめれば、『湘報』の意義は、すでに見たように湖南省に密着して行われた所にあり、湖南の風気の開発と変法運動、資本主義的思考、資本主義的企業の実施に一定の役割を果たしたと考えられる。そして、そのことが中国全体の変法運動にもあずかって力があつたし、変法の貴重な資料を後世に残すことにもなったのである。

## おわりに

以上、『湘報』について見て来たが、以下まとめれば、湘学新報のあとを受けて、湖南省の変法を行うため、また南学会の機関誌として戊戌の春、熊希齡を責任者として、譚嗣同、唐才常等によって設立、組織、運営されたものであった。

その執筆内容は、譚嗣同、皮錫瑞、唐才常、樊維、何来保などが中心であり、湖南省に変法をもたらし、政治の近代化と共に、鉄道の敷設、産業の近代化、資本主義化をし、湖南省、さらには、中国

を世界の中で富強な独立国にしようとする論説が見られた。また公文書の転載などにより、省民の目を時事に開かせようとするものであった。

『湘報』の参加者は、譚嗣同を中心とする変法左派であった。

『湘報』は僅か3ヶ月で停利せざるを得なかったが、湘報の意義としては、変法鼓吹により、湖南省及び中国を近代化して行くのに短期間ではあれ、影響があったと思われる。

## 第七項 『国 聞 報』

はじめに

本項においては、変法運動における啓蒙的報館の一例として『国聞報』を取り上げる。<sup>①</sup>

まず、『国聞報』の発行について述べ、ついでその組織、機能、内容、参加者、意義などについて明らかにして行きたい。

### 1. 『国聞報』の発行

『国聞報』の発行の意図については、天津国聞報館啓<sup>②</sup>には、

維新は固より佳い。旧に従うのを善に更め、宣しく自立すべきである。皆、群を利するのに足りる。その言はこのようだ。求益の事を見て求め、異に会して観通するのは独りでは功を為すのがむずかしくても、衆ければ、力と為り易いことは、非常に明らかなことだ。私は儒術に服されて清の時代に遭遇している。或いは、少丁（若者）では、多難であったが、遠く世界を渉り、或いは、長じて知識が四方にも通じたかも知れない。悟ってここに、横行斜上の書を野に求める。

畸人子弟の学は、未熟でも微尚があり、粗く津途を啓くものだが、時難に際して、敢て自ら閉ざすことをしないで、今天津に国聞報館を創立する。願わくは、諸君子が後に従い、1、2を補いつくろわんことを

とあり、旧きに従うを善に更め、自立すべく衆人が立ち上がることを求め、敢て天津に国聞報館を創立した様子が伺われる。

発行の年月、場所、意図などについては、まず、国聞報、第二葉に、国聞報縁起<sup>③</sup>が見え、「光緒23年の夏、館主が、国聞報を天津に創することを議し、略、英国のタイムス紙に仿い、日報の後に、旬報をもって継ぎ、5ヶ月も、越えて、事を成した。報がまさに出た。客で訪問する者があり、国聞報は何のために設けたのかと問うた。そこでまさに通を求めるだけだと言った。すなわち通の道には2つあり、1つは上下の情けを通じるのであり、1つは、内外の故を通ずるのである」と述べられており、光緒23年夏、天津に『国聞報』をタイムスに似せ、上下の情と中外の国交を通ずるために創設したことが知られる。

また、縁起の中に、

本館所報の例は提要2つある。1に繙訳であり、1つに採訪である。露、英、仏、独、米、日

本、欧、墨の若きとその他の諸国から各国の報を凡そ百余種萃取し、各国の文学に通曉している士、10余人を延聘する。採訪の報は、天津を本地の如くして、保定のような省都、北京、河南、山東、山西や陝西、甘肅、新疆また奉天、吉林、黒龍江の三省、西藏、内外蒙古の如き、外国は、ロンドン、パリ、ベルリン、セントペテルブルグ、ニューヨーク、ワシントンの如く、訪事の地は、大小凡そ百余ヶ処であり、訪事の人は、中外凡そ数十人である。

と見えており、各国の百余種の新聞から記事を抜萃すること、中国の内外百余ヶ所を訪問することが知られる。ついで、

一国の事を見るのに、上下の情を通じれば足り、各国の事を観るのに中外の情を通じれば足り。上下の情を通じて後、人がその利を専ら私にせず、中外の情を通じて後、国が其の治を専ら私にせず、人がその利を専ら私にしなければ、一人の智力を積みめば、一群の智力となり、吾の群は強い。国が其の治を専ら私にしないで、各国の政教を一国の政教とすれば、吾が国は強い。即ち本館報を設けた理由であり、取るに足りない私が黙しているのは、祈願しているのである。

と述べており、個人も国も私利のみを求めないで、上下通、中外通をし、中国を自強させるのが、『国聞報』の目的であるといわれている。

## 2. 国聞報の組織と機能

『国聞報』の組織については『嚴復集』『中国近代報刊史上』によれば、主筆が嚴復、発起人が夏曾佑、王修植、杭辛齋である。<sup>④</sup>

ついで、『国聞報』の機能について、国聞報館章程<sup>⑤</sup>によって明らかにする。章程は5条より成っているので、以下それを見て行く。

第一条には、

(1) 本館の出版する報は、2種類ある。日報は毎日一張を印し、八開を計える。4号の鉛字を用いて、排印し、名づけて、「国聞報」という。旬報は10日に1冊を印し、約3万言を計え、3号鉛字を用いて排印し、名づけて、「国聞彙編」という。

とあり、日報の『国聞報』と旬報の『国聞彙編』の発行が意図されていたことがわかる。

第二条には、

(1) 日報は、首に本日の電伝上論をのせ、次いで、ロイター電報、本館主筆人の論説、天津本地新聞、京城新聞をのせ、ついで、保定、山東、山西、河南、陝西、甘肅、營口、牛莊、旅順、奉天、吉林、黒龍江、青海、西藏の各処の新聞をのせる。次に外洋の新聞をのせ、東南各省の新聞に至る。東南各新聞社の詳細は本館ではいっさい述べない。

とあり、上論、ロイター電、本館主筆の論説、天津本地新聞をはじめ中国の16の地域の新聞、東南各省の新聞などが取り入れられている。

第三条には、

(1) 日報は、別に付録を出すが、お金は取らない。まず広告をのせ、ついで、毎日の上論、宮門抄、京外の各衙門の奏摺をのせる。奏摺を印刷した所は、四圍を空白に留め、閱報の諸君が集めそろえ、裁定して本を作るのに便ならしめる。

とあり、附録について述べられている。

第四条には、

(1) 官長を毀謗し、隠私して攻めあばくのは、但、国家の律令をおかすのみならず、実に報章の公理ではない。凡そ、ここにさしさわりあれば、本館は、一切登載しない。もし、冤罪を着せられる等の事情があり、報章を借りて申诉すべく、本館に至りて、広告にのせようとする者は、署名し、信頼すべき保証人があれば、本館が代ってのせることを許す。姓名を隠匿するような件は、いっさいのせない。

とあり、国家の律令をおかすようなものはのせないことと、冤罪の申诉等を許している様子が知られる。

第五条には、

(1) 日報は、毎月、制錢300文で売り、旬報は冊ごとに制錢150文で売り、1年に33冊を計え、全年を定購する者は、1部ごとに制錢4000文でうる。

他都市部郵送料は、遠近に照らして加費を酌量する。凡そ本館に代って報を売る者は、その費用の八割で計算し、二割を代って売る経費とする。但し、各代売人は、読者から費用を取っても本館が定めた値段より多くすることは出来ない。

とあり、新聞、雑誌の値段や郵送料、経費について述べられている。

### 3. 『国聞報』の内容

『国聞報』の内容については、諸先学の研究があるが、特に王枬氏、方漢奇氏の研究を参考にしながら考察して行きたい。<sup>⑥</sup>

さて日本には管見の限り、『国聞報』は現存していない。只、東洋文庫に、光緒29年に江西の西江欧化社から印行された、『国聞報彙編』のみが現存している。

今『国聞報』と『国聞報彙編』の異同を検討すれば、『国聞報』の社論の大部分と来稿訳稿の一部を含み、その他、直報に載せられた「原強」、「論世変之亟」、「救亡決論」を転載し、光緒29年前後の敵復の論説も転載している。

また、欠けているものとしては、「天演論」、「群学肄言」、「論膠州章鎮高元讓地事」、「論膠州知州某君」、「駁英泰晤士報論德据膠澳事」、「国聞報館章程」などがある。

ついで『国聞報彙編』の内容について見て行く。『国聞報彙編』には、次の45の論説訳稿等が載せられている。

すなわち、その目録によれば、



「天津国聞報館啓」、「国聞報縁起」、「論中国之阻力与離心力」、「書中国備赴万国費城商会事」、「論滬上翺興女學堂事」、「論中国分党」、「中俄交誼論」、「論俄人為中国代保旅順大連灣事」、「再論俄人為中国代保旅順大連灣事」、「原彊」、「論世變之亟」、「救亡決論」、「答人論議院書」、「擬上皇帝書」、「西學通門徑功用說」、「書本報訳報後」、「論華人之可用」、「婚姻強種議」、「弭戰議」、「論治事治學宜分二途」、「有如三保」、「保種余義」、「論保国会」、「保教余義」、「道學外伝」、「道學外伝余義」、「論訳才之難」、「時務報各告白書後」、「論中東商情職務」、「說難」、「論歐亞相關之勢後案」、「論中国之信機祥」、「漢唐以來歷代辺備得失論」、「論八股存亡之關係」、「閩中不可建都說」、「除楊墨弁」、「論支那之不可分」、「論中国教化之退」、「民權与民主不同說」、「附侯官嚴幾道先生近文陸則」、「学生会條規序」、「日本憲法義解序」、「与外交報主人論教育書」、「主客平議」、「与新民叢報論所訳原富書」、「上管學大臣論版權書」がある。

これらの論説は、国内問題と国際関係に分類できる。国内問題は32であり、国際関係は13である。また嚴復が書いたものは22ある。訳稿は3ある。以上、『国聞報彙編』について触れたが、今まで述べたことを通して元来『国聞報』に含まれていた論説について言及して行きたい。

そのうち、国内問題3、国際関係1を取り上げ、訳稿についても触れる。

国内問題では、「論中国之阻力与離心力」、「論滬上翺興女學堂」、「論保国会」を考察する。

「論中国之阻力与離心力」<sup>⑦</sup>は、光緒23年12月に刊行され、嚴復の著作と考えられるが、まず次のように見えている。

西人で、物理を論ずる者は、「凡そ物が形成されて後、もし別の力が物に加えられなければ、その物は永く変異しない」と言っている。しかし、天下の物は点々密かに移り、前後相続して変易を聞くことが無いのである。則ち阻む力と離心力がある。阻む力は、もしその物が行こうとする方向があると他力があって、これを阻んで行かせない。或いは阻む力が四方から俱に生じて、本体に極大の逼迫を受けしめ、その面目を更める。離心力は、萬物の極微によって合わせて来ているものであり、内に求心力を具えている。もし、その相互の吸引力が失われれば、点ごとに各々相推移して、本体がその形成を失い、何もなくなってしまう。この二力が均しく能く物を致すのであり、その中で離心力が尤も甚しい。

と述べられており、物には、阻む力と遠心力があり、遠心力の方が影響力のあることが知られる。

また、この例を家の再興に取り、その家の父子兄弟が心を合わせて努力をすれば、その家を阻む力が小さくなりついには無くなり、求心力になるが、父子、兄弟が相猜忌すれば、その家に離心力が働いて、外侮の来る前に内訌の勢いによって、家を支えることができなくなってしまうといっている。

ついで中国で勢いがなくなっているのも、歐洲の阻む力によるが、中国は阻む力を拒否することができないのではなく、離心力の故に勢いがなくなっており、中国がその踪跡をうしない、むごきにおののく原因は離心力のさ細なことによるのだとあらまし言われている。さらに、「中国の救うことのできないものは、大端にあるのではなく、細事にあり、見えるものにあるのではなく、隠微にある」

と述べられている。

最後に「この病には、古の初めからあり、今日に現れて、これを積むことが久しく、之を治療することは困難である。これを名づけていないが、名づければ離心力である。中国の実情では、これを止めないのか、或いはこのような甚しさがいいのかかわからない」と述べており、以上まとめれば、中国を亡すものは、阻む力ではなく、中国内の遠心力であり、それは細事であることが知られる。

「論滬上朔興女学堂」<sup>⑧</sup>は、光緒23年12月、嚴復によって書かれたものと考えられる。まず、

中国4億人には、婦女がその半分居り、婦女で字を識らない者もまた、10のうち9居る。即ちたまたま1、2の書物を知っている者がいても、その余力をもって詞章を粗解するに過ぎない。物がめずらしく、珍しいものを見る。ついに人は自らの命を通ずる。はじめいわゆる学問を知らなくても、人が禽獣と異なる理由は、名前がすでに人であり、学問に当れば、男女を異なる者としな。区区たる数字を識ることがどうして奇才があるとするに足りるだろうか。

と述べられており、中国には女性が半分おり、字を識らない者が9割であるが、学問をすれば、男女の別がないことがいわれている。

ついで女性は、今まで学問がなく、婦人の一生の事は、化粧をし、纏足し、坐して食したおれるのを待つだけだったといっている。また、

中日和議のあと、世を憂う人が競って学校を言い、近く更に上海に女学堂を創興した。この後、志ある女の人がもし、能く努力をすれば、何んで、西洋人の跡に比べてできないのを患うべきであろうか。一家に坐食の人が無ければ、家の係類が軽く、家の係類が軽ければ、後人が余力をもって其の事に従事でき、或いは、挽回して頹俗、軟弱を強きと為すことができるかも知れない。だからといって、人の学問は、僅かに読書するだけでなく、宜しく世を閱すべきである。けだし、読書は、古人の世を閱するのであり、世を閱覧する者は、今の人の書を読み、事の起りを相もとめ、一つとして廃すべきではない。

と述べられており、上海に女学堂ができ、坐食の人がなくなり、学問をし、世を閱する者ができるといっている。ついで、

中国の婦人たちが男子に及ばないのは、天が及ばないのではなく、人が及ばないからである。列女伝、女誡より以来、婦人を圧制して之を奴隸として待遇し、之を防ぐことは盜賊に対するようであり、これを責めることは聖賢を責めるようである。

と述べられており、中国では、婦人の人権が、尊まれていなかったことが知られる。また、嚴復は、この外に買妾の例、娼妓の多数と各地への分散、男女の問題に対する嚴罰などを取り上げ、結論として次のように言っている。

欧州の婦女には妾がないという一事によって、実に東洋に勝れている。その余は、なお、男子との不平等はある。上にプレジデントなく、中に議員たるなく、下に下士官がない。起居、飲食、威儀、進止の間だけ男子は女子を均しく優待するだけである。不平等の待法と、開化して

「いない国が、弱者を欺凌する事とは同一である。開化の国は弱者を保護すべきである。ああ！雄牝牡の齊しくないのは、人あるいは人でなくてもその由来は、遠くから来ており、一朝一夕の力で能く改めることができるだろうか。」

と述べ、真の男女平等の社会の到来の願いとむずかしさを訴えている。

「『論保国会』<sup>⑨</sup>について見て行く。同論説は王建祖からの来稿である。まず、何を国と謂うか。人民が有り、政治が有り、自主の権があり、天下並立の勢に与ることができるのを国と謂う。人民がいても、政治が無ければ、国と謂うことはできない。自主の権が無く、天下並立の勢いに与ることができなければ、更に国と謂うことはできない。だから国を保つことは、その人民を保ち、その自主の権を保ち、その天下に並立するの勢を保つのを第一義と為すことである。」

と述べられており、まず国を保つことは、自国の自主独立のもとにあることが言われている。ついで、王建祖は、中国の現状を観察し、外国において移住者の権利を護っていないので民を失っているといい、つづけて、

「海関の利権は外人が執って数十年であり、100億の金額を収めても、只一つの学院を設け、海関の才を養成し、他日の計と為すことは聞いていない、国債一事についても露は之を争い、仏も之を争い、英も之を争っている。当事者は、齊に仕え、楚に仕えるの歎きを免れない。鉄道を築き、礦務を興す事も、露、独、仏が並んでこれを争っている。軍隊を整え、練兵する実権も、独と露がこれを争っている。これは中国がその政治を失ったということだ。租界中の領事の治民權も、日本はこれを恥じ自ら30年奮い、恥を革めた。中国では、租界は、日に公使、領事の権をひらいており、日に自主を重んずるの権を失っている。国と国が相懸する勢ならば、並立が可能であり、侵略の禍をよく免れることができる。中国は、50年来、再び英に挫け、仏に敗れてベトナムを割譲した。日本に辱められ、朝鮮を失った。露独に迫られて、膠州湾と旅順を手をこまねいて人に授けている。中国分割の議論がまた今日煽られているのは並立の勢を失ったからだ。四者を失えば、独立国である事を皆失ない、これを国亡びると言うこともできるだろう。」

と述べられており、中国の最近の歴史の中で、民を失い、政治を失い、自主権を失い、並立の勢いを失い、亡国の危機にあることが知られる。王建祖はこれに続けて、

「志士仁人が種族の將にそこなわれ、宗国の將に滅び、教化の権の將に自ら持つことが出来ないのを痛んで、保国、保教、保種の議を倡え、新聞を盛んにし、学会を立て、広く議を謀った。人々の敢えて行わない所を行い、人々の敢えて言わない所を言い、身を挺して天下の忌諱を犯したのは、その志は嘉しとすべきであり、その誠は、感すべきであり、義は公に至り、理は純に至っている。」

と述べ、保国のための新聞や学会を立てた志士仁人を評価していることがわかる。つづいて、悲しんでいるのは、南海康氏が当世知名の士である。中国がその国たるを失うゆえんを痛んで、

京師に保国之会を倡え設けた。北京の士大夫でこれをそしる者があり、これを仰ぐ者はいない。建祖は、愚であり、敢てこの会が果して保国できるか否かは言わない。そもそも、英の名士マコーレーは、「国の強さは、その民が多く剛過ぎるのによるのであり、国の弱さは、その民がおどおどしていくじがなさ過ぎるのによるのである」と言っている。私も中国が強国の民の風を有するのを願う。

と述べており、康有為が国を失うのを痛んで保国会を作った様子が知られる。最後に王建祖は、保国会に願うこととして、能く人民を保ち、政治を保ち、自主の権を保ち、並立の勢を保って中国を保つことのみだと言っている。

国際関係として、「西学通門徑功用説」<sup>⑩</sup>を取り上げ、簡単に触れて置く。これは、光緒24年8月に嚴復が通芸学堂で行なった講演である。すなわち、

昔、英人ハックスリーは、書名を化中人位論という書物を著している。大意は、人間と猿とは同類であり、人の能く人たるゆえんは、言語ができるところにある。すなわち言葉ができて後、智を積むことができる。よく智を積む者は、前代の閥歴はこれを後世に伝え、継続して長くし、増し、高めており、風気が日に上り、それによって、原始人から野蛮へ野蛮から開化となっている、これが即ち教学である。

と述べ、ハックスリーの社会進化論を紹介している。ついでベーコンについて述べ、彼が練心をもって知識を積む第1の要義としており、心には理と情があることや、窮理を学ぶには、考訂、貫通が必要であり、考訂には観察と実験があることが言われている。

最後にヨーロッパの学問などについて紹介されているが、今それらを一応自然科学と社会科学に分ければ、前者には、化学、力学（水、音、光、電磁の諸学を含む）、天文学、地学、人学、植物学、動物学、数学、医学、薬学、農学、生理学、船や機器の操縦法などがあり、後者には、政治学、史学、理財学などがあげられている。

訳稿には、「婚姻強種議」<sup>⑪</sup>「論欧亚相之勢（後案）」<sup>⑫</sup>「論中国之信祿祥」<sup>⑬</sup>がある。『国聞報』に直接見られる他報は、管見の限り、『大公報』、『波摩報』、『時務報』、『昌言報』、『新民叢報』の5である。

#### 4. 『国聞報』の参加者

史料により、まず、国聞報の参加者表を作成する。<sup>⑭</sup>

報中の役割	氏 名	出 身	官職（又はそれに代る資格等）
主 筆	嚴 復	福 建	北洋水師学堂総弁
発 起 人	夏 曾 佑	浙 江	育才学堂総弁（天津）
〃	王 修 植	浙 江	北洋学堂総弁

“	杭 辛 齋	浙 江	同文館肄業
寄 稿 者	王 建 祖		
“	力 鐘	福 建	
翻 訳 者	嚴 培 南	福 建	
“	陳 錦 濤	広 東	

この表によれば、氏名の判明しているものは8名であるが、この他にも多くの北洋水師学堂や天津水師学堂の学生や国聞報編集部の人達があり、翻訳に従事していたらしい。<sup>⑮</sup>

いま名前の判明している者の官職で多いのは総弁（正四品）である。また、地域的分布としては、浙江、福建それぞれ3名ずつであり、広東が1人いたことがわかる。

なお、嚴復と同郷である桐城派の呉汝綸はのちに、天演論の序において、嚴復の文を絶賛している。<sup>⑯</sup>また、『国聞報』の読者は、当時の読書人層であった。

## 5. 『国聞報』の意義

『国聞報』は、戊戌変法実施以前の光緒23年に天津で発行され、清朝末期の中国、特にアヘン戦争以後、外国の圧迫を受け、その領土を段々と瓜分され、危機に落ち込んで行った中国を亡国から救う啓蒙的な役割を果たした。

すなわち、嚴復達は、中国の歴史の内情を明らかにし、その中で、上下の情を通ずることと各人が主体的・合理的に問題を解決することを説いた。

それが、「論中国之阻力与離心力」、「論滬上翺興女学堂事」、「論保国会」、「擬上皇帝書」、「論中国分党」、「論中国教化之退」などに見えている。

また、真に国内の問題を解決するためには、外国に目を向け、交わる必要のあることを説き、これを中外の故を通ずという言葉で表わし、進化論など西学を提唱し、議院の設立、立憲君主制などを唱えた。それらが、「西学通門徑功用説」、「天演論」、「群学肄言」、「中俄交誼論」などに見られる。

しかし、屠仁守は、「闢韓」を批判した。<sup>⑰</sup>また『国聞報』は、戊戌政変により、李盛鐸の指図で、江南道監察御史徐道楨の劾奏によって、1898年12月（光緒24年11月）発刊後1年余りで停刊に追い込まれた。<sup>⑱</sup>

しかし、『国聞報』や嚴復の考え方は、譚嗣同、梁啓超、鄒容、陳天華、魯迅、胡適、李大釗、陳独秀に影響を与えた。<sup>⑲</sup>

## おわりに

今まで、『国聞報』について考察して来たが、最後にそれらをまとめて置く。

まず、『国聞報』は、1897年（光緒23年）イギリスのタイムズに似せ、上下の情と中外の国交を通



ずるために、天津に創刊された。

その組織と機能については、「国聞報館章程」によって知られる。それによれば、まず、日報の『国聞報』と旬報の『国聞彙編』があり、上諭、ロイター電、本館主筆の論説、天津本新聞などが取り入れられていた。また、新聞、雑誌の価格や郵送料、経費などが知られる。

『国聞報』の内容としては、日本に『国聞報』がないので、『国聞報』の論説をまとめた『国聞報彙編』によって検討した。まず、国内問題として、「論中国之阻力与離心力」、「論滬上翊興女学堂」、「論保国会」を考察し、各々が主体的に中国を良くしていかなければならないと倡えていることが明らかになった。

国際関係では、「西学通門徑功用説」を取り上げ、ハックスリーやベーコン、欧米の自然科学、社会科学について触れた。最後に訳稿についても言及した。また、直接見られる関係報は5である。『国聞報』の参加者は、天津を中心とする学堂の総弁、学生などが主であり、出身地としては、浙江、福建にかたよりが見られた。

『国聞報』の意義としては、国内の上下の情を通じ、内外の国交を通じて、各人が主体的・合理的に中国を亡びから救い、立憲君主制を行うことが唱かれ、当時の中国人に大きな啓蒙的な役割を果たしたと思われる。

## 第八項 湖南課吏館

はじめに

変法運動における学堂の役割の一例として、本小論では、実学的な湖南課吏館を取り上げる。<sup>①</sup>

まず、湖南課吏館の設置の意図、設置場所、年代を明らかにし、ついで、湖南課吏館の機能、参加者を考察し、最後に湖南課吏館の意義を明らかにして行きたい。

### 1、課吏館の創設

梁啓超は、『戊戌政変記』の「論湖南庠序之事」の中で、民智を伸ばすものとしての時務学堂、紳智を伸ばすものとしての南学会、官智を伸ばすものとしての課吏館について述べているが、時務学堂<sup>②</sup>南学会<sup>③</sup>についてはすでに述べたので、ここでは、課吏館の創設についての梁啓超の考えを見て行くこととする。すなわち、前掲書には、

紳権はもとより当に務むべき急である。しかし、将来一切の事を并理するには、官を舍ては他に属する所はないのである。

すなわち今日、民智を開き、紳智を開こうと欲し、手を官力に仮りても、ほとんどわからない。だから官智を開くことがまた万事の起点となるのであり、官が貧しければ、官に民を愛することを望むことができないし、官が愚かであるならば官に事を治めることを望むことはできないのだ……。



彼（官）の胸中には、いまだかつて、地球の形はなく、欧州列国の国名もなく、学堂、工藝、商政が何の事かも知らず、修道、養兵が何の政を為すかも知らない。国家も又この考えを成すことがなく、大吏も又、この課を第一としない……。

だから、課吏堂を速やかに立てなければならない。<sup>④</sup>

と述べられており、民智を開く、紳智を開くといっても、まず、官智を開かなければならないと考え、この官智を開くために課吏堂が必要だというのである。

また、黄遵憲は、「湖南署臬司黄会等課吏館詳文」の中で湖南課吏館の必要性を次のように述べている。すなわち、

さて、課吏館の創設は、候補の各員に、居官の事理を講求させ、吏治、刑名の諸書を研修させようとするものである……。<sup>⑤</sup>

とあり、候補官の研修が考えられていたことがわかる。

このような意図のもとに課吏館が創設されることになるが、その設置場所は、「湖南改訂課吏館章程」第1条には、

1、府城の中央に、建物を一つ備え、名づけて課吏館とする。<sup>⑥</sup>

と述べられており、府城の中央に備えられていたことが知られる。

また設立年代については、『湖南省志第一巻、湖南近百年大事紀述』に

陳宝箴、黄遵憲等が梁啓超の建議に依拠して、1898年2月（光緒24年2月）に湖南課吏館を準備、設立した。<sup>⑦</sup>

と述べられており、巡撫陳宝箴、按察使黄遵憲等が、梁啓超の建議に依拠して、1898年2月に設立されたことが知られる。同様のことは、林能士氏も述べられておられる。<sup>⑧</sup>

つぎに、湖南課吏館の機能について見て行く。

## 2、湖南課吏館の機能

湖南課吏館の機能を明らかにするために、36条にわたる「湖南改定課吏館章程」を検討して行く。

第2条から第4条までには、課吏館の役員が述べられている。すなわち、

1、館中に総理一員を設け、専ら課吏の一切の事務を司さどる。

1、提調一員を設け、候補知府を充てる。凡そ、文章の記述、銀錢の支発、器具の管理の各事は、均しく提調の弁理に帰す。理事委員1名を設け、佐貳、雜職を充て、提調の差しつかわす者に帰す。

1、館中に一間治堂を設ける。品学兼ねて優れ、才識素より著しい者、2、3人を聘請して、館長とし、館中に住居し、総理の考課の各事を助ける。<sup>⑨</sup>

とあり、役員としては、総理、提調、理事委員、問治堂館長等が置かれていたことが知られる。

つぎに、館中の仕事については、第5条に

1、館中の各課は、分けて、6類とする。一に曰く学校。（凡そ造士、育才の法は、均しくこの

類に帰す。)二に曰く農工。(凡そ、務財、訓農、勸工、興業の法は、均しくこの類に帰す。)

三に曰く工程。(凡そ、道路を治し、溝洫を通じ、城池を修める法は、均しくこの類に帰す。)

四に曰く刑名。(凡そ、律例を考え、訟獄を清くし、罪犯を処す法は、均しくこの類に帰す。)

五に曰く緝捕。(凡そ、盜賊、会匪、根惡の一切の査緝の法は、均しくこの類に帰す。)

六に曰く交渉。(凡そ、通商、遊歴、伝教の一切の法は、均しくこの類に帰す。)<sup>⑩</sup>

とあり、第1に人材を育成する学校、第2に農工業を盛んにする農工、第3に道路等を治す工程、第4に司法関係を改善する刑名、第5に盜賊等を捕える緝捕、第6に、通商、遊歴、宗教の保護に関する交渉の6つの仕事に分類されていたことが知られる。

第6条には図書館のことを述べられている。すなわち、

- 1、館中に書蔵1ヶ所を設ける。有する所の課に分けた各類の書には、古籍、時務、総論、專書、図、表、書目がある。いちいちみな備え、各員の取閲に供す。<sup>⑪</sup>

とあり各類の古今の書籍等が課に分けられて閲覧に供せられていたことがわかる。

第7条には、課吏館で学業する者の資格等について述べられている。すなわち、

- 1、凡そ館に到る学業者は、同知、通判、佐貳、雜職に論なく、何項かを習うを願うならば、1類より、2、3類を兼ねることができる。また、その便を聞き、提調の処に行つて、自分で記帳する。<sup>⑫</sup>

とあり、課吏館の学業者は、官の上下を問われず、3類まで学習することを認められた。

第8条から第14条には、学業者の学習の方法が述べられている。すなわち、

- 1、すでに或る類を占めている場合は、どの本を閲覧したいかを願い出、提調を通して書蔵から受け取り、本人に渡して閲覧する。」

- 1、閲覧する本については、各人が自分で筆を用いて調べてしるし、所見は、書物の頁の上端にしるし、毎日、問治堂の検査に差し出し、調べが終れば歸して貰う。

- 1、各人は、札記簿2冊を作る。館中からどんな本を受け取つて見たか、或いは、疑問があつて、解決のいと口が見つけがたい場合、或いは、義理を明らかにする所がある場合には、行書で札記にひき写す。札記は、2冊備える。毎日、問治堂の批答のために提出する。2冊目を提出し、1冊目は引き取る。

- 1、問治堂館長は、各人の札記を日を逐つて、批答る。專答がある。専ら、その人の問う所で陳述しがたいものについて、答える。通答がある。その事の是非、得失について通論して答える。通答については、別に人に鈔録させ、堂中に貼り出し、将来、聚めて書物とし、再び選択して刊布する。

- 1、堂中に別に待問櫃を1つ設ける。各人が、習うところの本業とすでに札記中に批答えたのを除く外、凡そ、館長が貼示した通答及び、同僚の札記中の專答で、不明の所や、事理を明らかにしている所があれば、別に堂中の質問紙を取り、その所見を陳べ、櫃中に投入し、館長の世

(一) 答を待つ。

1、館において学習する者は、毎日、午前9時に館に到り、書籍を閲覧する。札記を受け取る時に館長に謁見する。面会して益を請う。12時で業をおわる。

1、各人で閲覧する書籍は、自らこれを札記にうつす。帰宅して、自ら学習を行うことをゆるし、もし在館中の学習者に願いがあれば、その便を聴く。館中には別に書室が1ヶ所あり、本人が紙筆を携帯、机について調査することをゆるす。<sup>⑬</sup>

と述べられており、課吏館で学習する者は、札記(メモ用ノート)を用意して、読書の所見を書き、問治堂館長の検閲を受け、質問があれば、それに書くなり、質問箱に入れたりした。また、問治堂館長は、答を堂中に貼り出し選択して刊布し、学習者を閲見した。また、学習者は午前9時から12時まで書籍を閲覧したこと等がわかる。

第15条から第18条にかけては、問治堂館長、総理について述べられている。すなわち、

1、問治堂館長は、毎日10時より、学習者各人に接見する。12時には退席する。各人の札記、館長の批答は、この時に面会の上、渡す。

1、総理の到館日は、現に日期を定めている。毎月、2、4、6、8、10、12、14、16、18、20、22、24、26、28、30日を到館日とする。

1、総理の到館日は、10時に到り、12時に帰ることを准す。この時総理は、館長と組んで、各人と接見する。

1、総理の到館した時に、各人の札記や館長の批答を閲覧する。総理は、某類、某条を立て随時、摘出して某員に質問する。その答を見て、その学業をはかる。<sup>⑭</sup>

と述べられており、問治堂館長、総理がそれぞれ、学業者と面接し、特に総理は、学習者に質問してその学業を考査することが知られる。

第19条から、第24条にかけては、学業者に対する学習成績の評価等が記されている。すなわち、

1、館中の考課は、積分の法を用い、3類に分ける。1つは、勤業である。すなわち、到館の時刻、閲覧した図書の巻帙、札記の條数につき、執業が恒であり、益を請うて倦まない者を取る。

1つは、善問である。その札記の質問を計り、その発言が精審で、求理の深い者を取る。1つは、進益である。その人の学ぶ所につき、その志趣の奮発、才識の開敏な者を取る。

1、積分の法は、別に1表を編す。

某官、某人の読んでいる書名を記入して明らかにし、3類を開いて図表を刊入する。その勤業、善問の2類については毎日、館長より、書きこむ。進益の1類については、毎月、館長と一緒に総理の書きこみによる。すなわち、うつし照して、1分とし、巡撫に呈送して検査して貰う。

1、館中の積分の法は、90分で合格とする。毎日の書きこみの1類は、3分を標準とし、多くても6分を踰えない。(勤業の1類の如きは、毎日、館に到る定時があり、課業を怠ることが無

ければ、1分を記入するのを准す。閲覧した図書が10篇を過ぎ、知識を調べてみて手本と同じような者には、1分を記入するのを准す。札記に1条以上、100字以上書き出した者には、1分を記入するのを准す。善問の1類の如きは、問う所が、深切でなく、精審でない者で、記入しないのを除く外は、平常1分を記入する。善なる者は2分記入する。もっとも善なる者は3分を記入する。) 毎月合計して通算する。(もし、1つの類が、分に及ばなくても別の類が溢分する者がある。或いは、今日、分に及ばなくても、明日溢分する者がある。) 90分を踰える者は、溢分とする。例により、奨勉を得る。

1、毎月、館の課分数を記帳し、巡撫に呈送して、表に照して堂中に榜示する。3ヶ月に大考が1回あり、各人の溢分の多寡を調べ、給奨の原簿を定める。

1、毎年大考が4回あり、大考1回毎に、奨銀1,000両で、各人の溢分の数を統計し分数に照して銀数を計算し、各人に分給する。(もし、各人の溢分の数が溢れて、合計2,000分に至れば、1分毎に銀5銭を得、某人が溢れて100分に至れば、その人は、50両を得、多寡に論なく、概ねこの計算に照す。)

1、6ヶ月ごとに、再び巡撫及び司道に請うて、館に到り、彙考を1回行い、各人の益分の及分者、不及分者を調べてしるし、等第に分別して順序に並らべ6等とする。一は上の上、二は上の中、三は上の下、四は中の上、五は中の中、六は中の下とし、姓名、官職、等第を館内に榜示する。また、全省の道府州県の各役所に通知する。<sup>⑮</sup>

とあり、学習者の学業については、まず、適宜、総理が調べるが、制度としては、積分の法が用いられたことが知られる。すなわちそれは、3類に分けられて、第1は謹業であり、読書とメモの量のはかられた。第2は善問であり、発問の良さがはかられた。第3は進益であり、学問上の努力がはかられ、いずれも分数で示され、90分で合格とされ、毎月巡撫に成績が送られた。また、毎年大試験が4回行なわれ、その分数が調べられ、多いものには奨金が送られた。さらに、学習者は、6ヶ月毎に巡撫、按察使等により、成績が6段階に分けられ、姓名、官職、成績が館門に掲示されたことが知られる。

第25条、26条については、来館できないが学習を願っている者についての取り扱いが述べられている。すなわち、

1、凡そ、省の候補で現に巡遣すべき人員があるが、公務のために、束縛されてまだ日を考えて館に到る便のない者で館で学習することを願う者には、1、2類を占めることを許す。本人は、書籍を取閲し、札記にうつして送る。館長より批答があり、その分数をしるし、今までの章程に照して、一律に処理する。別に総理より分別して、伝見する。分数が溢していても、奨銀は給しない。なお、分に照してしるす。総理から、月に按して冊を巡撫に呈送する。或いは派遣を留め、或いは欠点を調べる。巡撫により、調査、奪の決定が総べられる。

1、すべての各府州県の現在の官で、欠員があり、もし某類を占めることを願う者があれば、何

かの書を読み、自分で札記にうつし、到館中の者に寄せる。館長はまた一律に批答する。<sup>⑭</sup>

とあり、在省の候補官で、館に到る事のできない者にも、外府州県の現任官でも、学習を願い出る者があれば、到館者とほぼ、同様な取り扱いを受けることが知られる。

第27条、28条には、学習者ですぐれた案を提出した者に対する取り扱いが述べられている。

すなわち、

- 1、あらゆる現任者が欠員している各府州県において、当該の地方で、改むべき書院、修むべき水利と訓農、勸工、捕盗、緝匪、刑名の質問の案、交渉の方法にまで及んで、総理に指示することを請う者があれば、また、分別して批答る。或いは、当該の地方で何項かの興すべき利、何項かの革すべき弊、その地方の民情習俗の如何、官役の積弊の如何について、本原より切実に陳べることを請う者があれば、同様に総理を通して、巡撫の調査、弁理を別に請うべきである。

- 1、何項の人員かを論じないで、もし、よく時務を請求し、利弊を指摘し、條陳請願し、確かに切実に有用に係る者があれば、総理は、別に延見を行い、別に巡撫の調査と処理を請う。<sup>⑮</sup>

とあり、各府州県の改むべき書院、修むべき水利、訓農、勸工、捕盗、緝匪、刑名、交渉等について指示したい者や利を興すこと、弊を改めること、民情習俗の内容、官役の積弊について述べたい者、時務を請求し、利弊を述べ、條陳請願するのに有能な者があれば、巡撫の調査と処理にゆだねることが知られる。

第29条には、学規のことが述べられている。すなわち、

- 1、館中に別に館規がある。凡そ、到館学習する者は、均しく須べからく遵照すべきである。規を犯す者があれば、過を記すごとに、一回について分数を二分減ずる。<sup>⑯</sup>

とあり、館内には学規があり、それを犯す者は、1回に2分減点されることが知られる。

第30条から第35条までは、課吏館の関係費用のことが述べられている。

- 1、館中の応さに用うべき経費は、暫くは、旧来の課吏館の支出すべき金銭を分別して取り出し、ひとまとめにして提調より受渡す。

- 1、現に相談して、館長3人を聘请し、各人に歳修銀800両を送っている。一切の人夫、馬、飲食の費用は、館長が自ら備えている。この項の支出銀は、2,400両である。もし京朝官や他省の紳官に係る場合は、相談して、別に旅費を見計らって送る。

- 1、館中の契銀は、大考1回毎に、銀1,000両を支出し、合わせて年に4,000両を支出する。

- 1、提調には、月に給料40両支出し、理事委員には、月に給料を10両支出し、この2つの金額を合わせて銀600両を支出する。

- 1、館中の一切の費用は、提調の見計らいにより、総理に呈して調査して定める。月に分けて支給する。



1、開弁の始めは、まず、各類の書籍、図表を購入して備える。相談して銀1,000両を支出する。<sup>①9</sup>  
とあり、最初課吏館の費用の支出は、旧来の金額を踏襲していたこと、館長に歳費として800両を支給すること、大きな試験のための奨金の予算は、年間4,000両であることや提調、理事委員の給料が知られる。また、館中の費用は、提調が総理と相談して決めていたこと、開館当初は、書籍などのために1,000両が支出されていたことが知られる。」

最後の第36条には、費用の追加の方法、章程の改正のことが述べられている。すなわち、

1、現在、館中では、元来の経費を分別して支用しているが、もし足りなくなれば、再び巡撫に支出を請う。館中で未だ事宜を尽せない所は、すべて、将来、章程を改正することもある。再び、時に随い、事に随い巡撫の調査をお願いする。<sup>②0</sup>

とあり、現在の課吏館の費用で足りない所は、巡撫に支出を請うとか、将来、章程を改定することが知られる。

以上、湖南課吏館の機能について見たが、つぎに、参加者について考察して行く。

### 3、湖南課吏館の参加者

湖南課吏館の参加者を考察するに当たり、まず、参加者表を作成しておく。<sup>②1</sup>

館中の役割	氏 名	出身地	官職（それに代る資格等）
提 唱 者	梁 啓 超	広 東	挙 人
設 立 者	黄 遵 憲	広 東	按 察 使
	陳 宝 箴	江 西	巡 撫

関係史料からは、3名の氏名しか判断できない。それによれば、提唱者は、梁啓超であり、設立者は、黄遵憲、陳宝箴である。すなわち、変法中間派の提唱により、変法派の湖南省首脳部が設立したのであり、派別から云えば、中間派から右になるであろう。その出身地域は、広東2名、江西1名であり、その他の学堂、報館、学会とも相関関係が見られる。

官職について見れば、巡撫（従2品）1名、按察使（正3品）1名、挙人1名であり、氏名の判名している者だけから云えば、地方の上層官僚に傾りが見られる。

この外にも、章程によれば、提調として、候補知府（正4品）1名、理事委員として佐貳雜職1名、総理1名、問治堂館長3名、それに候補官である課吏館の多くの学習者がいたことがわかる。しかし、今の段階では、その参加者一人一人の氏名は、判明していない。



#### 4、湖南課吏館の意義

湖南課吏館の意義は、変法思想の普及を背景とした実学の研修による官吏の再教育にあったと思われる。

まず、変法思想の普及との関係で考えるならば、当時、どの省でも変法思想との関係では、官吏の再教育は行なわれなかったと思うが、変法思想が只一つ根づいた湖南省においてのみ、この実施がはじめて可能であり、大きな意義を持ったと考えられる。

また、梁啓超は、課吏館の理想を次のように述べている。すなわち、

……将来、南部諸省が分割されても南支那が忘れないためにこの会を南学会と名づけた。南学会は、実に衆議院の規模を隠かに寓し、課吏堂は、実に隠かに貴族院の規模を寓し、新政局は実に隠かに中央政府の規模を寓した……。②

とあり、湖南が分割された時、南学会を衆議院に、課吏館を貴族院になぞらえていること等が知られるのである。

ついで、実学の研修による官吏の再教育ということに関しては、当時の清朝が置かれていた状況を考える時、中国が早く西欧風の実学、すなわち、学校、農業、工業、土木工業、司法、警察、外交交渉等の実際の学を会得して、独立富強の国にしたいという梁啓超達の変法中間派の考え方が切実に反映されていると考えられる。そして、このことは、当時の清朝にとって必須のことであつたばかりではなく、現在の中国の4つの現代化の問題とも密接に関連している。

湖南課吏館は、湖南省における反変法派の台頭、戊戌政変によって、1年にならないうちに閉鎖の已むなきに至ったが、③その意義は、現代においても見直されて然るべきであろう。

#### おわりに

以上、湖南課吏館について考察して来たが、以下のまとめと問題の提起が可能であると思われる。

まず、湖南課吏館は、官吏の実学的な専門知識をたかめ、ひいては、紳智や民智をたかめるために、1898年（光緒24年）2月、湖南省の府城の中央に設立されたものであった。その機能については、36条よりなる章程により、知ることができる。すなわち、役員としては、総理、提調、理事委員、問治堂館長等が置かれた。また、館中の仕事としては、学校、農工、工程、刑名、緝捕、交渉の6部門が取り上げられていた。課吏館には、図書館が設けられ、官職の上下を問わず、平等に閲覧に供されていた。学習者は、メモ用ノートを用意し、読書の所見を書き、問治堂館長の検閲を受けた。学習時間は、午前9時から12時までであった。問治堂館長や総理は、学習者と面接し、館長は、学習者の質問に答え、それを選んで刊行し、総理は、学習者に適宜質問をした。

学習者の成績は、勤業、善問、進益の三方面からはかられ、90分を合格とするいわゆる積分の法が用いられた。大試験は、6ヶ月毎に行われ、その成績が6段階に分けられ、館内に掲示された。来館できないが、学習したい者にも便宜がはかられた。また、各府州県の具体的な問題について述べたい

者にも便宜が与えられた。館には、守るべき館規があった。

課吏館の経費は、最初、旧来の課吏館の経費が当てられた。館長、提調、理事委員等にも給料が支払われた。学習者には、成績に応じて、奨金が支給された。館中の費用は、提調が総理と相談して使用した。なお、開弁に当っては、書籍等のために銀1,000両が用意された。

参加者として氏名が判明している者は、梁啓超、黄遵憲、陳宝箴の3名であり、変法派の派別からいえば、変法中間派から右ということになるだろう。出身地域は、広東、江西であり、その他の学堂、報館、学会とも相関関係が見られる。官職は、地方の上層官僚に傾きが見られる。その他、候補官の役員や学習者達がいた。参加者については、残された問題として、今後精しく検討して行きたい。

湖南課吏館の意義は、変法思想の普及を背景とした、実学の研修による官吏の再教育にあり、変法思想が根づいた湖南省独自の機関であった。梁啓超は、これを貴族院になぞらえている。

湖南課吏館は、戊戌政変により、1年にならずして閉鎖の已むなきに至ったが、現在、中国で言われている4つの現代化の起点ともなるものであったと云っても過言ではないであろう。

### 第三節 外国侵略に反対する政治組織

アヘン戦争の敗北の結果、中国は、外国の半植民地となっていった。

もっとも、アヘン戦争の時も三元里の農民の平英団の活動はあったが、清朝政府によって、押さえられる結果となった。

洋務期には、中国の北洋陸海軍が創設されたが、日清戦争に敗北し、北洋陸海軍は、壊滅的な打撃を受けた。

日清戦争の結果、日本への台湾割譲、遼東半島の割譲が決まりかけたので、西欧列強は、三国干渉により、日本の遼東半島占領をあきらめさせ、それぞれの国の勢力範囲を確保して行った。

その中でドイツは、膠州湾を占領したので、変法派の人達もこれに反対して、政治組織として、保国会を設立した。

この運動は、拡大して、保漢会、保浙会、保川会などを設立させたが、その中で事例研究として保国会を取り上げて行く。